

椿が落ちるとき

杉山大二郎

昨夜から降り続いた雪は、朝にはすっかりやんでいた。

相馬久右衛門は白い息を吐きながら空を見上げる。鈍色の曇天が重くのし掛かってきた。

それでも沸き立つ心持ちに、久右衛門の胸の内は晴れやかだった。喜連川藩江戸屋敷の門を出ると、踏み締める雪に足を取られぬように気を配りながらも道を急いだ。

元禄十五年（一七〇三）師走十四日。

久右衛門は本所にある吉良^{き ら}上野介^{こうずけのすけよしなか}義央の屋敷に向かう。

上野介は元は江戸城郭中の呉服橋に居を構えていたのだが、公儀（幕府）の要職である高家肝煎^{こうけきもいり}を辞して無役となったため、これを召し上げられて深川に移っていた。

深川に行くには、大川（墨田川）を越えるために、両国橋を渡らねばならない。昔は文字通り大橋と言ったらしいが、武蔵国と下総国を繋ぐ橋なので、今では両国橋と呼ばれている。

つまり本所は江戸を出て、総州の地にあった。大川を跨ぐだけで、ずいぶんと町の様相が変わってしまう。川向こうまでは公儀の町作りの手も緩むのか、上野広小路や両国広小路のような派手な賑わいは一気に薄れ、途端に人々の喧噪^{けんそう}も鳴りをひそめた。

頬に当たる寒風も、厳しさを増すようだ。

上野介の屋敷の辺りは無縁寺裏と呼ばれている。無縁寺とは回向院^{えこういん}のことで、十万人の死者を出したとも言われる明暦の大火の無縁仏を弔うために建てられた寺だ。

陽が昇ってなお、人通りは少ない。寂しく暗澹^{あんたん}とした気を纏っていた。

この一角に旗本の松平愛之助の屋敷があったのだが、空き家になっていたのだから上野介に引き渡された。手を入れても、元が朽ち果てたあばら屋では限りがある。呉服橋の屋敷は、出羽米沢藩上杉家に養子に出した息子・綱憲^{つなのり}から莫大な援助を得て建てた豪邸だったことを思えば、都落ちの感は否めない。

が、それも神君家康公が江戸に開府して以来となった大騒ぎの始末と考えれば、果たして致し方ないのであろう。

久右衛門は小さな溜息を吐いた。

公儀は例年、朝廷に対して年頭の礼使を送り、その後、朝廷は答礼^{ちよくし}の勅使を江戸に差遣するのが習わしとなっていた。

去年は勅使下向の供応馳走役に、赤穂藩主浅野内匠頭^{たくみのかみながのり}長矩が命じられ、勅使供応に関する礼式作法などの指南役には、例年通り高家肝煎である上野介が任じられた。

高家とは、朝廷と公儀の間を取り持ち、儀式や典礼を司る役職である。誰でもが就けるものではなく、名家の家格を持ち、故事典礼に通じた旗本のみが選ばれた。

浅野内匠頭に限らず、武家である大名に営中の形式因習に長けた者は少ない。勅使を迎えたときに遺漏^{いろう}があつては大事となるため、供応馳走役を拝命した大名は、^{こぞ}挙って上野介に教を乞うた。

吉良家は、徳川譜代の名家である。

禄高こそ四千二百石の旗本だが、上野介の従四位上^{じゅしいのじょう}の官位は、徳川家家門大名や譜代大名のうち老中などの重役を務める者、外様大名ならば十万石以上の国主にしか授けられることがないものだ。

吉良家は、清和源氏足利家から、鎌倉が世を治めた頃に、足利宗家の継承権を持ったまま分家した支族である。足利家が將軍職を担っていた世では、「御所（將軍）が絶えれば吉良が継ぎ、吉良が絶えれば今川が継ぐ」とまでいわれたものだ。無論のこと、本当に吉良家が將軍職に就けるものではないが、それだけ足利將軍家に血筋が近いということになる。

家康公は関ヶ原の戦いを制した後、大坂の陣によって豊臣家を滅ぼすと、朝廷に征夷大將軍を望んだ。が、源平いずれかの姓を持たなければ任官は認められない。

当然ながら家康公に、源氏の血は一滴たりとも流れていなかった。

若い頃に松平元康から、「家康」に名を改めている。「家」の字は源氏の棟梁である源八幡太郎義家にあやかっ^{まこと}たと実しやかに伝わっているが、これは征夷大將軍になった晩年の作り話である。「家康」に改名した少し前に、幼い頃に生き別れた実母^{おだい}の於大^{かた}の方と再会を果たしていた。このとき、於大の方が再嫁していた相手が久松長家（後の俊勝）だった。親交の深かった義父から「家」の一字をもらったのであって、三河国さえ統一できていなかった若き日の家康公が、源頼朝や足利尊氏などの先祖である義家にあやかるなどという大それたことをする訳がなかった。

朝廷との談判に窮した家康公は、従兄弟の吉良義定（母が家康の祖父の娘）に相談した。

義定の妻は今川氏真^{うじざね}（今川義元の嫡男）の娘である。今川家は正当なる源氏の血筋だ。

義定は妻の家系をさかのぼった吉良家の家系図を家康公に譲り渡した。家康公はこれを書き替えて作った徳川家の家系図を朝廷に出して、無事に征夷大將軍に任じられた。

源平藤橘^{かぼう}を仮冒することは、武家においては珍しいことではない。だが、もしも義定の機転がなければ、家康公は將軍になれていなかったかもしれないし、その後の天下泰平の世も続いてはいなかっただろう。

この義定の曾孫が、上野介である。諸国の大名が勅使の供応馳走役を務めるにあたり、指南役として頼りにするのも至極当然だった。

にもかかわらず、事は起きてしまった。

去年の勅使答礼の式典の日。幕臣、諸侯のいならぶ江戸城松の廊下において、あろうことか勅使供応役の浅野内匠頭が腰の小刀を抜いて、指南役であるはずの上野介に斬りかかったのだ。

幸いにして上野介の傷は浅かった。額と背中に刀傷を負っただけで、命に別状はなかった。

取り押さえられた浅野内匠頭は、奏者番の陸奥一関藩主田村建頭^{たつあき}の芝愛宕下にあった屋敷に網駕籠で護送され、お預けの身となった。

將軍徳川綱吉公は、勅使供応の大事な式典の最中に殿中を血で汚したことに激怒して、浅野内匠頭を取り調べることもなく、切腹と赤穂浅野家五万石の改易（取り潰し）を決めた。

なお、切腹もその日のうちに田村家の屋敷の庭先に敷かれた筵^{むしろ}の上で執り行われという。

これまでの公儀の慣例から、乱心ということならば蟄居か流罪となり、お家も家督継承で済んだかもしれない。しかし、乱心ではなく、遺恨による刃傷沙汰とされた。大名の評定としては、異例尽くしの厳しい処分となった。

一方の上野介は、襲われた際も殿中^{でんちゅう}であることを鑑みて己の小刀には手をかけなかったことが認められ、お咎め無しとなった。喧嘩両成敗が天下の大法とされる中では、これも異例の評定となった。

とはいえ、傷の癒えた上野介は、高家肝煎の職を辞すと、隠居を願い出た。要職を離れた者に吹く風は冷たい。屋敷を召し上げられた末に行き着いたのが、この深川の荒れ果てた屋敷だった。

「それにしても冷えるな」

久右衛門は綿入れの襟を掻き合わせると、首を竦めた。それでも足の動きは緩めない。一刻も早く、吉良家の屋敷に行きたかった。

「はい。本当に冷えますね」

中間（小者）の徳兵衛が隣で首肯する。

徳兵衛は喜連川藩江戸屋敷に奉公している中間で、国元から久右衛門に付き従って出て来ていた。久右衛門より三つ上だから、もうすぐ齢五十になるはずだ。鬢には白いものが

目立つが、百姓として大地に鋤を振ってきたからか、^{かくしゃく}嬰鑠とした体軀は少しも衰えを見せない。

久右衛門が連れている供の者は、徳兵衛だけである。そもそも喜連川藩江戸屋敷に詰める家臣は、久右衛門を含めて三人しかいなかった。中間は徳兵衛の一人だけで、女衆（下女）さえいなかった。

「いくら寒いからといって、背中荷は落とすなよ」

久右衛門は、いつもの調子で軽口を叩く。

「吉良様への大切な歳暮の進物です。わたしの腕をなくしても、この荷だけは落としませんよ」

生真面目な徳兵衛が、少しムツとしたように言い返してきた。

「あまりに寒いから、少し戯れ言を言っただけだ。そのように怖い顔をするな」

「怖い顔は生まれつきです。お気に召さないのであれば、わたしの母親に言ってください」

徳兵衛が足を止めると、眉間に深く皺を寄せる。

喜連川家から吉良家への歳暮の進物は、毎年の恒例となっていた。殊に今年は格別な意味を持っている。

「わかったから。もう機嫌を直せ。大事なお役目なんだ。さあ、急ぐぞ」

久右衛門の言葉に、徳兵衛は再び頷くと、雪の積もる道を歩き出した。



「足下の悪い中、ご足労いただき、かたじけない」

平身低頭していた久右衛門は、上野介から柔らかな声をかけられて、ゆっくりと面を上げた。

「吉良様。此度は当家への格別なる取り計らいの義、主より厚く御礼を申し上げるようにと言いつかっております」

「何を水臭いこと申しておられます。喜連川家と吉良家は共に足利の血筋。わたしは御所様を身内同然と思うております」

上野介が親しみを込めて、喜連川家当主である昭氏をこう呼ぶのはいつものことだ。

「公儀の高家肝煎である吉良様より、そのような温かいお言葉を頂戴し、恐悦至極に存じます。本日はご不在と伺っておりましたので、主より申しつかった歳暮の品をお預け

して帰る所存でございましたが、こうして拝謁をお許しいただきまして、かたじけのうございます」

「実は宗偏殿そうへんを呼んで、先程まで茶会を催しておりました。御所様より今年も歳暮が届いたと聞きまして、少しばかり座を抜けて参ったところです」

そう言って、上野介が童のように悪戯っぽい笑みを浮かべた。

上野介は大の茶の湯好きで有名だった。上野介の「上」の字を「ト」と「一」に分けて、「ト一」と号して頻繁に茶会を催していた。

千利休の孫・宗旦の一番弟子である四方庵宗偏よほうあんそうへんとも、茶会を介して親交を重ねている。

宗偏は、老中である武蔵岩槻藩主小笠原長重に召し抱えられて、吉良邸から程近い本所に住んでいた。今日も長重を主賓として吉良邸に招き、総偏とともに茶会を開いていたようだ。

茶会といっても終われば酒肴が供され、吉良家の家臣まで交えての宴となる。言われてみれば、上野介の頬はほんのりと赤らんでいた。

「よろしいのでございますか」

久右衛門は恐縮して尋ねる。

老中を主賓に招いた席を、小藩のそれも一介の家臣である久右衛門に会うために、こっそりと抜けて来ているというのだ。それだけ喜連川家を大事にしてくれているということだが、むしろ申し訳ない思いのほうが先に立つ。

「良いか悪いかと問われれば、良い訳がありません。ですから、お帰りになられても、わたしとは会えなかったということにしておいてください。後で知れたら、ご老中が気を悪くなされますから」

上野介が和やかに口角を上げながら、目を細めて微笑みかけてくる。高貴な者のみが持つ気品のようなものが匂い立つようだった。

三

上野介の名を知らぬ者は、江戸広しといえども一人もいないだろう。

昨年さくねんの浅野内匠頭による刃傷騒ぎは、町筋で売られる読売（瓦版）でも大きく取り上げられた。火事と喧嘩は江戸の華といわれるほどで、高家肝煎の旗本と大名の血生臭い喧嘩は、人々の関心をさらった。

久右衛門も、その内のいくつかを買って読んでいた。そこに書かれていた上野介は、老獺にして底意地の悪いもののけのような男だった。

が、目の前で屈託なく相好を崩す老人は、読売に書かれているものとはまったく違う。

小振りの目は優しげで、鼻筋はすっきりと通っている。耳は大きく、ふくよかな頬はまるでつきたての餅のようだ。

徳川將軍家とも繋がる高位の身分にもかかわらず、偉ぶるところは少しもなく、久兵衛のような小藩の家臣にさえ、丁重な物言いを崩さなかった。

人懐っこい顔で頬を揺らす上野介は、人の良い老人にしか見えない。

「どこがもののけなんだよ」

うっかり口に出してしまってから、久右衛門は慌てて両手で口元を押さえた。

「ほほう。江戸の町では、わたしはもののけと言われておりますか」

「申し訳ございません」

久右衛門は両手をついて低頭する。

「どうぞ、顔を上げてください。なあに、人の噂など、いちいち気にしていませんよ」

上野介は右手をヒラヒラと顔の前で左右に振った。

「恐れながら、読売では吉良様のことを好き勝手に書いております」

「根も葉もない噂ほど、人々の関心を誘うものです。読売をたくさん売りたいければ、真を引っ込め嘘を重ねたほうが良いに決まっていますよ。それを面白がるような輩もいれば、こうして御所様のように、今までと変わらず歳暮の進物を届けてくださる方もおられます。誠にありがたいことです」

上野介が満面の笑みを零す。

「ははっ。こちらこそ、ありがたいことでございます」

久右衛門は、深々と頭を下げた。

喜連川家は、わずか五千石の小藩である。

三代將軍徳川家光が定めたところにより、一万石を越えると大名となり、徳川家の縁戚を親藩大名、関ヶ原の戦いより前から徳川家に仕える者を譜代大名、関ヶ原の戦いより後に臣従した者を外様大名といった。

なお、徳川家の直参の家臣には、旗本と御家人があった。旗本とは、俸禄一万石未満で將軍への謁見が許される御目見の家格の者をいう。吉良家がこれに当たる。これに対して御家人とは、御目見が認められていない家格の家臣である。

喜連川家の石高は五千石で、一万石に満たないが、大名の家格を有していた。それどころか喜連川藩主は公儀から公に御所号を許され、「御所様」と呼ばれていた。また、公方の尊称も認められている。

全国三百余藩の中でも、御所様や公方様と呼ばれる大名は、喜連川藩主ただ一人である。

家康公が将軍職を徳川秀忠公に譲って駿府に移ると、大御所となった。二代将軍秀忠公も将軍職を譲った後は江戸城西の丸に入り、大御所として政務を執った。今の五代将軍徳川綱吉公まで、大御所を称したのは、この二人だけだ。

そもそも喜連川家は無高である。無高とは公儀より禄を賜っていないということだ。これも日の本広しといえども、喜連川家のみである。

家康公が天下を統一して征夷大將軍になったことで、すべての大名が臣下となった。だが、喜連川家の当主だけは、徳川家から禄を得ていない。あくまで臣下ではなく、徳川家の客分ということになる。日本で徳川家に臣従していない唯一の大名なのだ。

何故、喜連川家だけが別格扱いなのか。それは喜連川氏が、征夷大將軍となった足利尊氏の四男・基氏の後裔だからだ。

尊氏が同腹の弟である忠義と対立すると、足利家の争いは数代に渡って長く続いた。

鎌倉公方は将軍が関東十カ国を統治するために置いたものだったが、次第に將軍家に敵対するようになった。複雑な内紛の後に鎌倉を追われた鎌倉公方は、下総国の古河を拠点とする古河公方と下総国の小弓おゆみの公方に分かれ、さらに反目が続けた。

だが、北条氏が関東で勢力を増すと、両家は力を失っていった。小田原征伐で北条氏を滅ぼして天下を制した豊臣秀吉が、この両家を強引に結びつける。最後の古河公方の娘である氏姫と小弓公方家の子孫である足利国朝を婚姻させて、喜連川に所領を与えたのだ。

これは秀吉が徳川家康公を駿河から関東に移封するにあたり、その抑えとするために関東公方家の復活を後押ししたものだ。

だが、豊臣家は滅亡することになる。天下を手にした家康公は、清和源氏であることを仮冒して征夷大將軍に任じられた。

家康公は、徳川氏が清和源氏である新田氏の支流となる得川氏の末裔であると、吉良氏の手を借りて家系図を改竄かいざんした。己が源氏であることを世に示すには、源氏の本流である足利氏を同族として、家臣とは別格に扱うことが肝要だったのだ。

国朝が病没した後に家督を継ぎ、喜連川藩の初代藩主となった喜連川頼氏（国朝の弟）が家康公に拝謁したときのことだ。なんと家康公は座を立ち、頼氏を見送ったという。これは喜連川氏が足利將軍家の末裔であることに敬意を示したものだ。

故に、喜連川家は五千石の小藩にもかかわらず、十万石の大大名と同格の扱いを受け、御所号を称することを許された。

さらに御所様は徳川將軍家の客分であるから、臣従の証しである参勤交代は「国勝手」として免除され、妻子の在国も許された。

喜連川家の江戸屋敷が久右衛門たち家臣三人ほどの小さなものであるのも、参勤交代がないからである。

「ところで吉良様。当家の国替えのことでございますが、事は如何様に運んでおりますでしょうか」

久右衛門は表情を引き締めると、上野介に尋ねた。

「うむ。すでに上様（将軍）から、ご内諾は賜っています」

「誠にございますか！」

思わず声が裏返ってしまう。

「喜連川家が如何に十万石の大名並みの扱いを受けようとも、その実は下野国の草深い山の中に、小さな所領を与えられたに過ぎません。喜連川家は我が吉良家と同じく源氏の血を引く名家です。足利尊氏公ゆかりの三河国こそが治める地として相応しい」

後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権の北条義時に対して討伐の兵を挙げて敗れた承久の変において、足利義氏は武功の恩賞として三河国の守護に任じられた。義時の後、泰氏、頼氏、家時、貞氏、尊氏と、代々の足利家当主が三河守護を務めていた。吉良氏は、三河に土着した足利氏の分家だった。

「おおっ。そのお言葉、御所様にお聞かせいたせば、どれほどお喜びになることか」

久右衛門は膝行して上野介の膝元に躰り寄ると、目に涙を溢れさせて低頭した。

「上様には柳沢様（吉保）を通じて内々に話をしております。喜連川家の三河への国替えについては、上様もお認めくださっていると、老中格の柳沢様がお墨付きをくださっています。近いうちに沙汰が下ることでしょう」

かねてから上野介は、喜連川家は三河の大名として所領を治めるべきであると、将軍綱吉公に働きかけてくれていた。それがついに実を結んだということだ。喜連川家にとって、これほど喜ばしいことはない。

喜連川家が、三河国のどこかに一万石を超える所領を拝命して、名実ともに大名となるのだ。

思い描いただけで、涙が溢れて止まらない。

「ありがとうございます」

久右衛門は肩を震わせながら、上野介に礼を言った。

四

立ち上がった上野介が、障子を開けて庭に目をやった。

久右衛門は、つられるように上野介の目線を追う。

真っ白な雪の中で、椿の花の赤い色だけが一際目を引いた。

「久右衛門殿。椿は、何故わざわざ寒い冬に花を咲かせるのでしょうかね」

「さあ、わたしにはわかりかねます」

「神仏のされることに、意味のないことはありません。椿が雪の中で花を咲かせることにも、きっと何か訳があるのでしょう」

まるで己に言い聞かせるように、上野介が口にする。

「御意にございます」

いつの間にか、雪が降りはじめていた。

「大雪になりそうですね。今夜は当家に泊まっていてください」

再び障子を閉めた上野介が、手あぶりの前に座すると、久右衛門に微笑みかけた。

「誠にかたじけのうございます。しかしながら、主の命にて伺っておりますので、急ぎ帰りまして国元に書状をしたためたく存じます」

「そうですね。良い知らせは、早く伝えたいですからね」

そう言った上野介の額に、つい目がいってしまう。深く刻まれた刀傷は、癒えてまだ間がなく、生々しかった。

久右衛門は慌てて目を落とす。

「申し訳ございません」

「やはり、気になりますか」

「そのようなことは……」

言葉を濁した。が、かえって言い訳のように聞こえる。

「浅野内匠頭殿に斬られた傷です」

言われなくても、江戸中で知らぬものはいない。だが、改めて上野介本人の言葉で聞くと、刃傷騒ぎについて聞き知ったときの驚きが鮮明に蘇った。

「内匠頭様は何故、このような……」

そこまで言いかけて、久右衛門は己の非礼に気づいて口を閉じる。

「わたしが何故、内匠頭殿に斬られたのか、知りたいですか」

気づけば、上野介の面から笑みが消えていた。

「いえ。そのようなことは」

「久右衛門殿。少しばかり帰りが遅くなることになるが、お付き合いいただけますかな」

有無を言わせぬ強い言葉だ。

「承知仕りました」

久右衛門は背筋を伸ばすと、身仕舞いを正した。

「世間では、わたしが斬られた訳をなんと噂していますか」

「それは……」

さすがに本人を前にして、読売に書かれているようなことを口にはできない。

「遠慮はいりません。だいたいのことは耳に入ってきていますから」

そこまで言われて、久右衛門は覚悟を決めた。ここで正直に対峙することこそ、喜連川家に多大な力を貸してくれている上野介に報いることだと思えた。

「吉良様は勅使供応馳走役の指南をするにあたり、高額まかないの賄を得ていたと聞いています。供応役のご指南は公儀の御役義。吉良様は高家として禄を得ているのですから、賄を受け取るのは道理に合わぬと、これを内匠頭様は拒まれた」

「随分と手厳しいですね」

「い、いえ。わたしが申しているのではなく、読売に書いてあった話です」

久右衛門は額を流れる汗を、取り出した懐紙で拭う。

「たしかに指南の札にと、大名たちから金子や進物を受け取っていました」

「やはり……」

「しかし、それはわずかばかりのものです。病人が医者にかかれば、治療代を払うでしょう。道場で剣術を学べば、師範に礼金を払うものです。これを賄とは申しません。大名に吉良流札法について指南したのですから、謝礼を受け取るのは物の道理というものです」

「内匠頭様が賄を払わなかったから、増上寺の畳替えの支度がいるところを教えなかったと聞いております。礼服は烏帽子に大紋にもかかわらず、長袴と偽って教えたとか、勅使に供する料理も、精進料理に変えるようと嘘を指南したという話も書いてありました」

「それは酷い」

上野介が眉根を寄せた。

「違うのでしょうか」

「わたしは極悪非道の輩だということになっているのですね」

まるで他人事のような言いようだ。

「読売に、そのように書かれていました」

「どれも、まったく身に覚えはないです」

「真ですか」

「まったくの作り話です。如何にも、これほどの悪行をしていたのであれば、歌舞伎か浄瑠璃にでもなりそうな話ですね。大入り間違いなしです」

上野介は軽口を言うと、大きく肩を揺すった。

「笑い事ではありません」

「これは失礼しました。ですが、考えてみてごらん下さい。勅使の接待にそれほどの手抜かりがあれば、内匠頭殿が恥をかくだけではすみません」

「たしかに、そうです」

言われてみれば、もっともな話だった。

帝の勅使の供応に大きな遺漏が生じれば、これは將軍家の威信を傷づけることになる。

「内匠頭殿は知らなかったこと故に咎もそれなりかもしれませぬが、高家肝煎として故事典礼の指南役であるわたしは、この皺腹を切るくらいでは済みません」

そう言いながら、上野介が手で己の腹を切る真似をした。

「では、塩についてはいかがでしょうか」

「塩ですか」

上野介が首を傾げる。

「播州浅野家では領内の五箇所の浜から日の本一とも称される上等な塩が取れます。石高にすれば、五万石を越えるとも聞いたことがあります」

「赤穂の塩は、江戸でも大いに人気であるそうですからね」

「この塩の製法は、赤穂藩の秘伝となっていますが、吉良様がこれを教えるようにと、内匠頭様に迫ったとか」

「何故、わたしが塩の製法を聞かねばならないのでしょうか」

上野介が狐に摘ままれたような顔をした。

「吉良様の所領では、赤穂藩のような上等な塩が作れぬからでございます」

「当家で良い塩が作れないから、浅野家の秘伝の製法を教えるように、内匠頭殿に無理強いしたということですか」

ついに堪えられなくなったのか、上野介が腹を抱えて笑い出す。

「笑い事ではございませぬ」

ムツとして、久右衛門は口元を歪めた。

「いや、これは笑わずにはられません」

「何故でございますか」

「良い塩も何も、当家では塩など作っていませんよ」

「えっ？」

久右衛門は絶句した。

「当家の領する地は、三河国幡豆^{はず}郡吉良庄、岡山、横須賀、乙川、饗場、小山田、鳥羽、宮夾の八箇村の三千二百石の他、上野国緑野^{みどの}郡の白石村、碓氷^{うすい}郡の人見村、中谷村の三カ村の一千石が飛び地であるくらいです。ほとんどが山中で、塩を産するような浜は、どこを探してもありません」

「塩は作っておられぬのですか」

「如何にも。干潟を埋め立てた小さな浜はありますが、とても塩など作れるようなものではありません。山を切り崩しての新田開拓には長年にわたり取り組んできましたから、開墾についての良策ならば、ぜひとも伺いたいところですが、海で塩を作ることに、いささかも興味はありません」

人の噂など、如何に当てにならないか。久右衛門は啞然とするばかりだった。

「では、何故に内匠頭様は殿中で小刀を抜かれたのですか」

「わかりません」

上野介が拍子抜けするくらいあっさりと答え、ゆっくりと首を左右に振った。

五

「神仏のされることに、意味のないことはないとおっしゃったではありませんか」

久右衛門は得心がいかない。

「そう言われても、わからぬものはわかりません。ただ、内匠頭殿が刃を向けてこられたとき、わたしには乱心されたとしか思えませんでした」

「内匠頭様は心を患われていたと申されるのですか」

「内藤忠勝殿と稲葉正休殿のことは、覚えておられますよね」

言われて、久右衛門はハッとした。この二人の名を知らぬものはいない。いずれも江戸を大いに騒がした人物だった。

二十一年前の延宝八年（一六八〇）。

先の將軍家綱の七七日法要において、増上寺の警固の任にあたっていた内藤忠勝は、上席である永井尚長と口論になり、小刀を抜いた。逃げる尚長の長袴を踏み、前のめりに転んだところを刺し殺した。

忠勝は切腹を命じられ、内藤家は断絶となっている。

十七年前の貞享元年（一六八四）。

稲葉正休は江戸城中において、大老堀田正俊を刺殺した。

若年寄だった正休は、水害に悩まされていた淀川の治水策を献策した。普請費用を四万両と見積もったが、疑義を持った堀田正俊が河村瑞賢に問い質したところ、半分の二万両で賄えると答えが返ってきた。堀田正俊が治水の任から正休を外したことで怨みを持ったという。

正休はその場にいた他の老中たちに斬殺され、稲葉家は改易となった。

内藤忠勝は内匠頭の母方の叔父であり、稲葉正休は同じく母方の又従兄弟になる。

この似たような三件の騒動が、同じ血筋の上に繋がっているとしたら、上野介が言った乱心という言葉の意味も重いものになってくる。

「だからと言って、内匠頭様も乱心であったとはなりませぬ」

ドサリッと庭木に積もった雪が落ちる音がした。すでに日は暮れている。今夜は大雪になる言った上野介の言葉が思い出された。

「内匠頭殿には、痞の持病があったそうです。生来は生真面目でありながら、癩癩持ちの気性も合わせ持っておられたようです」

「それは真ですか」

痞とは心の病である。気がたかぶると胸が苦しくなったり、腹痛を起こしたりする。

「浅野家江戸家老の安井彦右衛門殿より聞いた話ですから、恐らくは間違いはないかと思います。内匠頭殿は痞の薬を飲んでいたそうです。それに……」

言いかけて、上野介が言い淀む。

「それに、为什么呢か」

「これは噂に過ぎませんが、奥方の下女を激高のあまり、手打ちにしたことがあるとも聞きました」

これについては嘘か真か、上野介も判ずることができないのであろう。

「吉良様。教えていただきたく存じます」

「如何なることでしょうか」

「内匠頭様が心の病を患っておられたとして、御公儀は何故、勅使下向の供応馳走役などという大役をお命じになられたのでしょうか。内匠頭様の病について、ご存じなかったということですか」

上野介が表情を引き締めると、首を左右に振った。

「知っていたからこそ、命じたのでしょうか」

「わたしには、わかりませぬ」

勅使の供応馳走役は、心身共に壮健な者だとしても甚だ荷の重い大役である。まして心に病を抱えている者であれば、負担は如何ばかりのものであるか。

「徳川將軍家が天下を治め、安寧の世が限りなく続くためには、どうしたら良いと思いますか」

問われて、久右衛門は思案する。

「戦のない世を作る政を成します」

「如何にも。そのためには、徳川將軍家より力を持つ大名がこの世からいなくなれば良いのです」

「それはつまり――」

「大名家を次々と改易として、所領は公儀の御料（天領）とするのです」

「お取り潰しとなった藩の家臣はどうなるのですか。家臣には家族や従者がいるのですよ。暮らしていけないではないですか」

「家臣は浪人となり、家族は暮らしに窮することになるでしょう。それでも国が戦に荒れるよりはいい。一人ひとりの民の暮らしより、守るべきは天下国家だと、公儀はそう考えているのです」

上野介が吐き捨てるように言った。

「それで浅野家五万石が狙われたのですか」

「公儀の矛先はもっと大きな獲物です。播磨赤穂藩浅野家は分家です。その後ろには、安芸広島藩浅野宗家が控えています」

安芸広島藩浅野家は、豊臣家五奉行の一人だった浅井長政を祖とする外様大名の雄藩だ。石高は四十万石を下らない。大坂とは瀬戸内で繋がる海運にも恵まれて、貿易によっても巨利を得ていた。

「しかし、赤穂藩はすでにお取り潰しとなっています。当主である内匠頭様も切腹し、弟の大学様（浅野長広）も連座して、浅野家は改易となっています。この先、広島浅野本家に累が及ぶことなどあり得ません」

「このまま何もなければ、そうかもしれません」

「どういうことでしょうか」

「改易になったのは、浅野家だけなんです」

それを聞いた久右衛門は、己の顔から血の気が引いていくのを感じる。

「それはつまり……」

上野介が頷いた。

「浅野内匠頭と吉良上野介が喧嘩をしたのです。喧嘩両成敗が天下の大法にもかかわらず、一方は吟味もなく、その日のうちに切腹を命じられ、もう一方は一切のお咎め無しとなった。このような理不尽な仕打ちを、主君を殺された赤穂藩の遺臣たちが黙って見過ごすと思いますか」

「お待ちください」

「当家の屋敷は江戸城郭中の呉服橋にありましたが、今ではこのような辺鄙な地へと屋敷替えとなっています。これではまるで、公儀が浅野家臣たちに上野介を討てとけしかけているようなものです」

「まさかそのようなことは、浅野家の遺臣たちでも……」

だが、久右衛門は、その先を言葉にできない。

「わたしの妻は、上杉邸に預かってもらっています。妻が女衆を連れて行ったので、この屋敷には男しかおりません」

なるほど、茶も出ない訳である。

上杉邸とは、上野介の長男（上杉綱憲）が養子に行った出羽米沢藩の江戸屋敷のことだろう。

「吉良様は、どうするおつもりのですか」

今日にでも浅野家の遺臣たちが、上野介の首を取りに攻め込んで来るかもしれない。

「久右衛門殿は、花によって終わりの呼び方が異なるのをご存じですか」

「花の終わりですか」

上野介が静かに頷く。

「桜は散る。梅は零れる。朝顔は萎む。菊は舞う。牡丹は崩れる。椿は落ちると言います」

「言われてみれば、花によって様々ですね」

庭先で見た、白雪に埋もれた椿が脳裏をよぎった。

「不老不死の人間などおりません。人は必ず死にます。ならば、いつ死ぬかではなく、なんのために死ぬかこそが肝要なのです。徳川の泰平の世を築く礎となれと求められるのであれば、それも天命なのでしょう」

「吉良様。お待ちください」

だが、上野介は静かに首を横に振った。

「やはり、今夜は当家には泊まらずに帰られたほうが良い。なんだか、そんな気がしてきました」

「しかし……」

「良いですか。今日、わたしは不在でした。久右衛門殿はわたしには会わなかった。だから、ここで聞いた話は、一切他言無用です。約束してください」

上野介の強い言葉に、久右衛門は黙って頷くしかなかった。

結

その夜の未明。赤穂四十七士が吉良邸に討ち入り、上野介は首を取られた。
上野介の死によって、喜連川家の三河国への国替えの話は立ち消えとなってしまった。
この夜の話はおろか、相馬久右衛門という家臣がいたことさえ文書には残っていない。

■参考文献

山本博文『これが本当の「忠臣蔵」』（小学館新書）
岳真也『吉良上野介を弁護する』（文春新書）